

新刊紹介

朱 俊風・朱 震達 等著：「中国沙漠化防治」
中国林業出版社、北京、1999年3月。495ページ。
88元（日本価格 約7,032円）。ISBN 7-5035-2160-4。

朱 俊風教授は1937年生まれ、1962年に東北林業大学を卒業し、現在は北京の林業大学教授である。林業部調査企画院・中国緑化基金会・全国緑化委員会副秘書長その他の沙漠化防止に関する国内の各種委員会の委員長・理事長を歴任した。研究者としては100編以上の論文・著書を発表しているこの分野の権威である。

朱 震達教授はわが国を何回も訪問しているので、日本や国際会議の場で講演を聞いた人も多いだろう。すでに140編以上の論文や著書・編書があり、その中でも「中国沙漠化及其治理」はその1部が日本語に翻訳され、日本の研究者も多くを学んでいる。1930年生まれ、南京大学地理系を1952年に卒業し、中国科学院に入り、その治沙隊新疆隊の隊長を務めた。後、蘭州沙漠研究所の所長を経て、現在は中国科学院、国家環境保護總局中国国際沙漠化研究センターの名誉主任、その他を努め、中国地理学会や中国環境学会・中国生態学会の理事長などを歴任した文字通りのこの分野の指導的立場にある大家である。

本書は建国50周年を記念して、刊行の計画が立てられ、沙漠化の防治に関する方法・技術に関する発展の総まとめとして執筆された。内容は5編、14章、49節からなる。第1編は沙漠化の理論と沙漠化地域の分布、およびその発展の情況と題し、沙漠化の概念やその社会経済発展に及ぼす影響について先ず述べた。沙漠化の成因や類型も要点をよく記述している。地質時代における沙漠の形成、歴史時代における沙漠化と生態変化などの総論も簡にして要を得ている。

第2編は沙漠化の防治で、その実態と研究の歴史を述べている。第3編は沙漠化を防ぐための技術と典型的なモデルをまとめている。特に、地域別にその土地に応じた方法が示されていて、困難な仕事であったことが推察される。第4編は沙漠化を防ぐことと、21世紀における持続的発展への目標・任務などをまとめている。第5編は、沙漠などの乾燥・半乾燥地域における自然資源と保護・希少野生動物植物・記念日「沙漠化日・世界環境日・世界地球日・国際森林年・中国植樹節」について記述している。

ここまでに本書の主要部分として317ページを使った。その後が附録で、関連した事柄に関する詳しい情報・資料を提供している。例えば動植物の中国名とラテン語名の対照、主要文献資料として、1990年代における江沢民や李鵬らの講演、法律、会議の議事録、学会における総合講演などがまとめられている。これまで、この種の資料は入手できなかったのも、オリジナル資料として、研究の背景を知ることに極めて役にたつものである。

以上の通り、中国の沙漠化の防治に関する50年間の歴史のすべてを本書は紹介している。沙漠化問題、沙漠化防止などにかかわる日本における研究者・技術者・政治家・企業家などにも非常に参考になる書物である。

新刊紹介

三村信夫・原沢英夫（共編）：「海面上昇データブック2000」環境庁国立環境研究所、
地球環境研究センター CGER-REPORT、CGER-DO25-2000
2000年1月発行、128頁
ISSN1341-4356（入手連絡先：305-0053 つくば市小野川16-2 地球環境研究センター）

この本の前身は1996年に「海面上昇データブック」として刊行され、関連した分野の研究者ばかりでなく、行政・建築・土木・災害対策・環境教育など、社会の各方面で利用され好評であった。本書はその増補改訂版ともいえるべきものである。

内容は、「地球温暖化・海面上昇のメカニズムおよび将来予測」、「沿岸域への影響」、「影響評価・カントリースタディー」、「国際的な取り組み」、「対応戦略と適応策」の章にわかれ、それぞれの中は、トピックごとに見開き2ページを使い、日本語と英語で、左ページは解説、右ページが図表としてまとめられている。カラー印刷で、読者は容易に問題点を把握できるように工夫されている。

例えば、影響評価・カントリースタディーの章の内容をさらに詳しく紹介すると、まず概観、ついでアジア地域の研究として、バングラデシュ、中国、インド、タイ、ベトナムが紹介されている。南太平洋島諸国の例としては概要について、フィジー、キリバス、サモア、トンガ、ツバルが紹介されている。日本の研究は一段と詳しく、災害ポテンシャル、東京湾に対する台風の被害、砂浜海岸の浸食、海岸構造物の対策費用についてまとめられている。最後に、世界及び地球規模の影響評価があってしめくくりとなる。

引用文献・索引・略語一覧が巻末にあって本書の利用価値を高めている。

これだけの内容をコンデンスして、データブックとして図表にまとめ、写真を集め、カラーで印刷するには、もちろんたくさんの人の協力が必要である。編集委員会には12名の専門家が参加し、事務局には、上記の地球環境研究センターから3人、パシフィックコンサルタンツから3人、翻訳者1人、デザイン／イラスト2人が参加した。日本で現在得られる最高の構成と言えよう。ここに紹介する第2版は、第1版より一層、温暖化の影響によって発生する海面上昇にかかわる情報源として、利用価値があると思われる。

ただし、もし第3版が将来計画されるならば、以下の点を考慮してほしい。(1)写真の中には撮影した年月日、場所の記述がないものがあるが、データとしての価値がさがるので、ぜひ記入してほしい。(2)カントリースタディーに取り上げられていない国々があるが、可能な限り（今後プロジェクトを組むなりして収集し）データソースの完璧を期して欲しい。(3)若干の校正もれ（例えば、目次2ページの4.3の南太平洋が南大平洋になっている）なども、データソースブックとしては細心の注意で校正してほしい。

海面上昇について述べた書物は今日、書店の棚には数多くある。しかし、本書のように、全般的に広く最新の資料にのっとり、しかも、わかり易く表現したものはほかにない。強く推薦できる刊行物である。

新刊紹介

真木太一：「写真でみる中国の食料環境と農林業」
筑波書房、東京、1999年10月発行、175ページ
2500円＋税、ISBN4-8119-0173-8 C 3061

著者は農水省の農業環境技術研究所その他の研究機関で農業気象学の研究にたずさわり、1999年からは愛媛大学農学部教授の経歴をもつ。そのかたわら、たくさんの著書をまとめ、また、写真は素人の域をはるかに越して、写真集も刊行して居る。しかしテーマは風、砂漠、農作物などが主体である。

本書は元は日中友好新聞の「写真で見る中国農業」にほぼ月1回の割合で、1994年12月から1998年10月までの間に64回掲載されたものが基礎となっている。新しく書き足して、70編とした。内容は環境問題としての砂漠化、緑化、人口、資源、社会生活などで、各々が約1000字、写真2枚でまとめられている。

10章からなるが、その各章のタイトルを記すと次の通りである。(1)乾燥・半乾燥地の自然と農業、(2)乾燥地域の果樹園芸など、(3)乾燥地域の野菜園芸など、(4)乾燥～半湿潤地の灌漑農業、(5)乾燥地域の環境問題、(6)半湿潤地の自然と農業、(7)食糧生産と食糧問題、(8)農業様式と農村生活様式、(9)農林・防風林の環境と林業、(10)牧草・草地環境と牧畜業で、あらゆる気候地域の農作物が対照となっている。

70テーマの地点の分布図がのっているが、熱帯中国の海南省・雲南省からはじまって、桂林付近・台湾があり、西安・上海・杭州・北京・承德などの地域から中国東北部の過遼・ハルビン・綏化などに至る。中国西北部の砂漠地域から甘粛省・内蒙古の乾燥・半乾燥地域が半数以上を占めるのは今年の著者の研究対象地域だったためであろう。

写真は極めてよく内容が選ばれていて、1テーマを2枚の写真で説明することは、決してやさしい仕事ではないが、著者の目的は達成している。2～3気をついた点をあげると以下の通りである。(1)写真が撮影された年月日と地点が書いてない。大まかには1990年から1996年であろうが、本書は20年先、50年先には、撮影された時点における状況を示すよいデータになる筈である。写真は情報伝達の手段であって、文字や数字では記述できない種々情報を提供するものである。その情報の価値を高めるためには、データの採取日時と地点は、欠くことができない。(2)1人の著者に、限られた紙面で完全を期待するのは無理かもしれないが、揚子江以南の記述が、以北に比較して少ない。福建省や江西省・河南省・貴州省などの例もほしい。またチベットや青海省も、農作物の収量からみれば少ないかもしれないが、特徴のある山地農業で、写真の価値は高いと思われる。(3)写真で語る書物としては、写真の刷上りが最高の出来とはいいがたい。今日、技術的にはもう少し安くて、鮮明・コントラストの度もはっきりした印刷が可能な筈である。

以上の点があるが、類書がなく、その意味で、教養書として価値が高い。市町村の図書館などに推薦できる図書である。

新刊紹介

赤沢 威：「ネアンデルタール・ミッション 発掘から復活へ フィールドからの挑戦」

2000年2月24日発行、岩波書店、東京、299+27ページ

定価（本体2800円+税）、ISBN4-00-001794-2

国際日本文化研究センター教授で先史人類学を専門とする著者が、30年間の古人類との対話を通じて、ネアンデルタールの研究成果をふまえて現代人に送るメッセージとして本書が生まれた。

第1章はミッションの始まりという副題で、わが国における西アジア研究の歴史が語られている。第2次大戦後の日本の先史学の生きた歴史を読者は知ることができる。

第2章はシリア砂漠に生きたネアンデルタールとして、パルミラの自然、シリア砂漠の湖の変遷、洞窟で発見された動物化石などが書かれている。

第3章はデデリエ・ネアンデルタールとの出会いで、本書に語られている著者の研究の発展の中のひとつのハイライトであり、読む者を引き込む。大きなフィールド研究を行う過程の展開を知ることができる。第四章以下は、資料の整理・解釈の仕方、論理の組み立て、などが語られている。

第六章では、コンピューターでデデリエの子供の全身骨格を復元し、歩かせることに成功した。今日の科学研究のパターンの好い成功例である。先史学ばかりでなく、フィールド研究全般に通じる非常にすぐれた提示である。地球環境問題に関連した研究を推進する本誌の読者にひとつの指針となる。

この背景には、テーマの着想や選定、研究者としての資質や努力がいかに重要であるかは言うまでもないが、それに加えて、国外の現地で研究する場合、当然生じてくるさまざまな「社会的」課題の克服があることがよくわかる。

今日、ネアンデルタールのブームと言われ、さまざまな書物が刊行されている。しかし、本書のように、ネアンデルタールに関する科学的知識を読者に与えるばかりでなく、上述のような、フィールドサイエンスの研究プロジェクトの展開に関連した周辺のことがらを詳しく、そして情熱をもって書かれている本はない。先史学・人類学の研究者以外の“地球環境”に関連する研究者にも広く推薦できる良書である。